

朝鮮人慰安婦の足跡たどる

「アリランのうた—沖繩からの証言」朴監督

「アリランのうた—沖繩からの証言」と題した記録映画の取材活動を続ける製作・監督の朴壽南(パク・スナム)さん。日本の戦史から葬り去られるように、存在を否定され続けていた「朝鮮人従軍慰安婦」、さらには同じく韓国から強制連行された朝鮮人軍夫の足跡をたどり、全ぼうを解明しようとしている。しかし、四十数年の歳月の流れによる問題の風化と、閉ざされた関係者の心を開かせるために時間がかかるなど、当初の製作費が底をつくといった大きな壁にぶつかっている。朴さんに記録映画作りの動機や製作内容、現状などを聞いた。

以前から韓国人の従軍慰安婦の存在を知っていたという朴さんは「同胞の女性

の手で、死んでいった彼女たちの無念をほらそう」とトをかけたようにしていた矢先、資金難で製作が一時中断するといった事態が発生。そこで、「アリランのうた」沖繩からの証言」を創るん、韓国でも取材活動をする会の沖繩のメンバーが力行ってきた。映画の年内完成を目指し、製作も追い込みに入り、朴さんはかけがえのない歴史だからと、まことに記録し、子どもたちにとんどん伝えたい」と創作意欲は増すばかり。ところが、映画の年内完



慰安婦として性の植民地となつた女性の存在を残そうと映画に掘り続ける朴さん

成を目指してラストスパークをかけたようにしていた矢先、資金難で製作が一時中断するといった事態が発生。そこで、「アリランのうた」沖繩からの証言」を創るん、韓国でも取材活動をする会の沖繩のメンバーが力行ってきた。映画の年内完成を目指し、製作も追い込みに入り、朴さんはかけがえのない歴史だからと、まことに記録し、子どもたちにとんどん伝えたい」と創作意欲は増すばかり。ところが、映画の年内完

制連行。「慰安婦は売春とは違い、意思を持たない。日本は初めから見殺しにするつもりだったとか思えない。日本人にとって朝鮮人は人間以下のものであった」と語る。

戦争がそして戦場が男の人間性を奪い女を性的植民地に

朴さんは映画製作を始めて多くの証言を集め、「慰安婦は国家暴力による日常的な強かん、輪かん」との認識を強くした。「軍隊が隊列を組んで慰安所に来て、五分の持ち時間を与えられる。これは性の快楽や慰安とはまったく違う」。

当時、沖繩に連行された朝鮮人と沖繩住民のかかわりについて、「朝鮮人は沖繩の人を抑圧された同じ仲間だと感じていた。しかし、沖繩の人のなかには朝鮮人を差別し、けがれたものと



かけがえのない歴史だからきちんと記録子供たちに伝えたい

支援金の口座番号は沖銀豊見城支店(普) 一一六七八一—

して見る人もいた。しかし日本人にとっては沖繩人も虫けらで、沖繩は日本の植民地にしかすぎなかった」と、戦時下での差別の構造を明らかにした。

強制的に慰安婦にされた女性たちは日本軍の行く先々に連れていかれながらも、敗走するときは「連合軍に知られると困る」との意向で「処置」。「(日本が)国家的な恥として慰安婦の存在をひたすら抹殺し、闇(やみ)に葬りてきたと朴さん。さらに、性に

が、日本人男性の東南アジアへの売買春ツアーを「現在の性の植民地を求める姿」にたとえたという。朴さんは過去の朝鮮人の姿に現代の女性問題をかいま見ている。「かつての慰安所は今でも戦場や基地の周辺には形を変えて存在する」。そんな現実を踏まえる。「女が本当に男から解放されるのは性の自立がなされたとき。つまり、戦争がなくなる限り男の解放はないし、ひいては女の解放もない」。

たと朴さん。さらに、性に關するタブーの多い韓国の風土も朝鮮人慰安婦の言葉を引き出した。「軍夫だった男たちは生き残ると古里に帰った。でも、女たちは心身をすたすに切り裂かれ、産む性をじゅうりんされて人間でないものにされた」。これらのことが慰安婦の全ぼうが解明されない大きな要因になっている。

数多くの取材の中で、強制的に慰安婦にされた女性たちは日本軍の行く先々に連れていかれながらも、敗走するときは「連合軍に知られると困る」との意向で「処置」。「(日本が)国家的な恥として慰安婦の存在をひたすら抹殺し、闇(やみ)に葬りてきたと朴さん。さらに、性に關するタブーの多い韓国の風土も朝鮮人慰安婦の言葉を引き出した。「軍夫だった男たちは生き残ると古里に帰った。でも、女たちは心身をすたすに切り裂かれ、産む性をじゅうりんされて人間でないものにされた」。これらのことが慰安婦の全ぼうが解明されない大きな要因になっている。

「沖繩の人が慰安婦をどのようなまなざしで見ているかを含め、加害者の証言で彼女たちの像を明らかにしたい。沖繩の人、特に男たちはしゃべりたがらない。しかし、彼女たちがどういう死に方をしたのか、存在を明らかにすることが彼女たちの「ハンプリング」(無念を少なくすること)になる」と、慰安婦や軍夫たちの姿を追い求め、協力を呼びかけている。